

巨大な魚

サケ・そしてイトウ

十勝の川にいる大きな魚と思ったら、サケとイトウでしょう。

サケ（シロザケ）の方は一生のほとんどを海で過ごし、最後に川に戻ります。イトウはかなりの時間を川で過ごしているようですが、数が少なくなり、幻の魚とも言われます。

サケはアラスカまで行って戻ってくる



日本産やサハリン産のサケの回遊

現在多くのサケ（シロザケ）は、人間の手で受精・ふ化が行われ、春に放流されます。自然では秋、わき水のある砂利底で産卵し、卵は約80日（水温6～7℃）でふ化、2～3ヶ月程は砂利の中で育ちます。砂利から出て水生昆虫などを食べるようになり、すぐに海に降るものと、数週間成長してから4～6月の雪解け水に乗って降るものがあります。

海に出たサケは北に向かい、夏はアリューシャン列島あたり、冬は南下と移動しながら成長します。3～4年前後海で過ごし、生まれた川に向かいます。

どうやって生まれた川に戻ってくるかはよくわかっていません。沿岸にたどり着いてからはにおいによって探し当てるようだとされています。



おびひろサケの会による
サケの稚魚放流（売買川）

サケの仲間の特徴 - 脂ビレ

サケの仲間には、イトウ、ヤマメ（サクラマス）、オシロコマ、アメマス、ニジマスなどがあります。これらサケ科の魚とワカサギなどキュウリウオ科の魚には背ビレと尾ビレの間（尾ビレ寄り）に小さなヒレがあります。

これを脂ビレといいます。十勝の川にいる魚では、この2つのグループだけが脂ビレをもっています。



サケ（シロザケ）



ヤマメ



ワカサギ

サケの遡上 - 産卵のため



遡上するサケ（シロザケ）



わき水のあるところで産卵行動を取るオスとメス

夏の終わりになるとサケが川を上り始めます。産卵期が近づくと、体は黒ずみ、赤・黄・緑のまだらもようを浮かべます。オスは赤が強く、上あごが伸びて下あごにさぶさり「鼻曲がり」とも呼ばれます。

産卵場所は砂利の底でわき水のあるところです。メスが尾ビレで砂利を掘って産卵する場所（産卵床）を掘り、そこへオスが寄り産卵と放精を行います。産卵後サケの一生は終わります。

多くのサケは捕獲されます。メスから卵（筋子）を取り出し、しばらくオスの精液をかけて、人工的にふ化を行います。



人工ふ化のためにサケを捕獲するため設置された「ウライ」（猿別川）

イトウ - 謎の多いままたん

イトウはサケと違って春に遡上して産卵します。川の上流部で産卵し、その後も死なず、何年も産卵できます。

ふ化後成長しながら川を下り、時には沿岸の海で捕獲されることもあります。ただ、すべてが海に降りるのか、一部だけなのか、わかっていません。

大きくなるものは1mを越え、その巨大さから、川をせき止めて湖をつくった、という伝説がある程です。しかし、最近は数が減っていて、幻の魚と言われるようになりました。

アイヌ語では、イトウは「チライ」と呼ばれます。イトウが遡上する所に咲くフクジュソウを「チライアバツポ（イトウ・花）」と呼びます。

ちなみに、サケはアイヌ語で「チエプ（我ら・食う・もの）」あるいは「カムイチエプ（神・魚）」と呼ばれます。

アイヌの人たちは、サケやイトウを食料とするだけでなく、皮を使って靴や服を作っていました。



春、赤く婚姻色を示すイトウ（幕別町ふるさと館）



1m以上あるイトウの魚拓（十勝川インフォメーションセンター）

参考文献

「漁業生物図鑑 北のさかなたち」 長澤和也・鳥澤雅 編 鮭北日本海洋センター 1991
 「山溪カラー名鑑 日本の淡水魚」 川那部浩哉・水野信彦 編・監修 山と溪谷社 1989
 「北海道の淡水魚」 稗田一俊 北海道新聞社 1984
 「検索入門 川と湖の魚②」 川那部浩哉・水野信彦 保育社 1990
 「サケ・マス魚類のわかる本」 井田齊・奥山文弥 山と溪谷社 2000
 「自然復元特集 4 魚から見た水環境－復元生態学に向けて／河川編－」 森誠一 監修・編集 信山社サイテック 1998

「図説 魚と貝の大辞典」 望月賢二 監修 魚類文化研究会 編 柏書房 1997
 「アイヌ植物誌」 福岡イト子 草風館 1995
 「北海道生活文庫 第2巻 北海道の自然と暮らし」 関秀志・矢島・古原敏弘・出利葉浩司 北海道新聞社 1997

米盛保（1975）北海道起源シロザケに対する標識放流から得られた結果の分析についての試み、北太平洋漁業国際委員会研究報告、第32号、p 123-151